

若い人たちに語り継ぎたい。そして、次の世代に残してほしい貴重な話しをお届けします。

お年寄りたちの貴重な体験談(第一回)

あすへひとこと

手作りの玩具

裏の竹藪から、竹を切りとり、枝を払い、節と節の間を切りとって、当時子どもに人気のあった肥後守という小刀で削る。青鼻を着物の袖で横なぐりしながら、口をへの字にまげたり、鼻をすすったりの忙しい作業である。幅二センチ、長さ十センチに割った竹切れに中心線を入れて、そこから左右一センチ位の所に線を入れて、左右反対方向へ傾斜をつけて、丹念に削っていく、裏返して同じように削っていくと、羽根ができる。羽根の中心に直径二センチ位の穴をキリでもみ、同じ竹切れを細く割って竹ひごをつくり、その穴に差し込み、両手のひらで、もむようにして回しながらバランスをとってヒゴの長さをきめてできあがりである。

バランスがよくとれれば両手で勢いよく回すと気持ちよく上空へ飛んで行くが、バランスが悪いと、そのまま落下してしまう。まだ小学校へ上がる前から近所の悪童連という



るな玩具を作ったものである。竹馬、水鉄砲、杉の実鉄砲、紙鉄砲、竹の弓などである。小学校上級になると、手のこんだ、タコ糸で回して飛ばす竹トンボや弁をつけた水鉄砲、カーバイトを使って大きな音のでる竹鉄砲などである。割り箸と輪ゴムで造ったゴム鉄砲、直径五ミリ位のゴム管を使って作ったパチンコでは、小石を飛ばして間違つて雀に当たり、雀が気絶して落ちたのを取って喜んだこともある。

夏になると前の田圃の中をいく筋もの小川や用水が流れ、メダカや小鯢の群泳が見られ、夜はホタルの飛びかう風景もあった。竹と雑木の丸棒を曲げて作った柵に網を張ったサデという道具で、小川や堀を漁ると小鯢やどじょう、時には鯉や鰻がとれる。夏休みなどは、毎日魚取りで明け暮れたものである。また竹ヒゴを編んで作ったウケといった道具を田圃の水口に伏せて、時間をおいて取りにいくと、ドジョウや鰻などが入ることもあり、それも楽しみの一つであった。すべてが手作りの道具で、自分なり

に工夫して作るのが楽しみであった。材料探しに森や林に入り、手足に引っかけ傷をつくったり、着物を力ギ裂きしてお袋に怒られたり、小刀で自分の指を切って手拭いを裂いて縛り、血がとまるのを待つて家に帰り、お袋に分からないよう薬箱からキズ薬をとって消毒して、また遊びに出掛けるといった毎日である。

秋になり山が紅葉になる頃は、柿や栗が熟れ、鎮守の森の栗の実の落ちるのも楽しみで、朝暗いうちから栗拾いに出掛ける。雨の降った翌朝などは一面に栗のイガや実が落ちて大収穫があったものである。秋も深まり落葉の季節になると、当時は燃料に薪や炭が主であったため、焚きつけ用に落葉が重要な役割を持っていた。みんな竹籠を背負って落葉集めをしたものである。中でも杉の落葉は火着きもよく、火力もあったので重宝がられた。竈のある台所の近くには落ち葉や焚き付けを置く場所が広くとってあり、いつも空にならないよう、小まめに落ち葉集めをさせられた。

また冬になると薪炭商が薪を馬車につんで届けてくれる。この薪を薪割りで細く割る仕事があり、毎日少しずつ割り軒下に積み上げる。当時子どもたちの遊びの一つでニッキという遊びがあった。直径三センチ位の太さ、長さ四十センチ位の手ごろな棒をこ

の薪の中から見つけ、その先端を尖がらせるのである。この棒を土に叩き付けるように投げ刺して相手の棒を倒すという遊びである。冬の田圃に稲藁の山が風よけになる所が遊ぶには格好の場所であったため、よくやったものである。

お正月が近づくと独楽回しや凧作りがはじまる、裏山から細い竹を切ってきて、小刀を丹念に研いで細く薄く削って組み立てる、うどん粉で糊をつくり、新聞紙を張り、バランスをとるための尾も新聞紙を三センチ幅位にきりつないで二メートル位のものを、二本つくり凧の下部につけて揚げるのである。強い風のときは尾がちぎれ飛んで、凧は真逆さまに落ちてしまう。何べんも張り直し、作り直して、ようやく天高く舞い上がったときは、ヤッター!というまでも糸を操って楽しんだものである。

手作りの楽しさは、それぞれ個性に富み、味わいのある作品ができるところにある。したがって現在のインスタントな、金さえ出せば買えるものと違って愛着があり、捨てがたいものである。

高齢者の語り第一集「あすへひとこと」思い出をたどって」より
「手作りの玩具」
故・前原 隆さん(前原・四区)

ひとりごと From editors

▼この春から広報担当になりました。以前の職場とは全く異なる仕事内容で、右も左も分からないまま1か月が経過。一日一日の過ぎるスピードがとても早く、まるで入職したてのころを思い出します。▼最近やっと重いカメラの持ち方に慣れてきて、笑顔の写真を撮る喜びが分かってきました。それと同時に、動きのあるものの瞬間をとらえることの難しさ、写真の奥深さもひしひしと感じています。▼まだまだ至らない点ばかりで、多くの人にご迷惑をおかけしていますが、「毎日が勉強、継続は力なり」を念頭に、日々コツコツと努力を重ねて早く仕事ができるよう頑張っていきたいと思います。(秋)



Photo 広報担当者



みどり深まる
初夏の訪れ
(役場庁舎周辺)



広報おうら

ORA TOWN Public Relations

平成23年6月号 No.537

毎月1日発行

編集・発行 邑楽町役場企画課

〒370-0692 (住所記入不要)

☎ 0276-88-5511 (代表)

☎ 0276-47-5007 (企画課直通)

☎ 0276-89-0136

URL <http://www.town.ora.gunma.jp>

E-mail koho@town.ora.gunma.jp

邑楽町携帯サイト

2次元コード対応の携帯電話は、右のコードをご利用ください。読み取りができない場合はURLをご入力ください。

携帯用URL <http://www.town.ora.gunma.jp/k>

